HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代ウイグル語の接辞-lIK について
Author(s)	新田, 志穂
Citation	北方言語研究, 5, 191-203
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/58355
Type	bulletin (article)
File Information	11Nitta.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 5: 191-203（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2015）

現代ウイグル語の接辞-lIK について

新 田　志 穂
（岡山大学大学院博士課程）

１．はじめに

本稿[1]では，現代ウイグル語の接辞の-lIK[2]について記述することを目的とする．接辞による膠着的形態法を持つ現代ウイグル語において, -lIK は生産性の高い接辞として知られているが，-lIK が付加された語（仮に“X-lIK”とする）は，句や節の末尾にも位置しうる．先行研究では-lIK を形容詞や名詞を派生する派生接辞としている．また，“X-lIK”が節末にある場合には，そのような派生接辞とは別個に記述されており，単なる派生接辞として捉えられていないことが分かる．本稿では両者の用法を整理しつつ，これらには接点も見られることを述べる（具体的には，辞書へ語彙的に登録されている“X-lIK”が，項を取りうるということを示す）.

本稿の構成は次の通りである: 2 節で現代ウイグル語の概略を示す. 3 節で-lIK の用例を簡略に示し，4 節で-lIK が先行研究でどのように捉えられてきたのかを見る．5 節で-lIK の構造上の付加先を示す．6 節で他の要素の修飾を受けていない“X-lIK”の例，句末に“X-lIK”が位置する例，節末に“X-lIK”が位置する例について，それぞれ考察する．7 節では，“X-lIK”そのものが辞書に登録されているにも関わらず，項を取ることから，節末に“X-lIK”が位置する場合との関連が見られる例があることを示す．8 節を本稿のまとめとする．

２．現代ウイグル語の概略

現代ウイグル語はチュルク諸語の一つであり，その話者であるウイグル人の居住地区は，中華人民共和国新疆ウイグル自治区を中心とし，隣接するカザフスタン，キルギス，ウズベキスタン，アフガニスタン，パキスタン，モンゴルなどにも及び，新疆ウイグル自治区内で 924 万人の人口を数える（2005 年調べ，菅原 2009: v）．正書法にはアラビア文字が使用されているが, 本稿の例文ではローマ字転写したものを用いる : /i/,/e/,/ä/,/a/,/ü/,/u/,/ö/,/o/,/p/,/b/,/t/,/d/,/k/,/g/,/q/,/ʁ/,/č/,/ǰ/,/f/,/s/,/z/,/š/,/ž/,/x/,/h/,/w/,/y/,/m/,/n/,/ŋ/,/l/,/r/,//’/．文法面に言及すると，接辞による膠着的な形態手法を持ち，修飾語は被修飾語に先行する．基本語順は SOV 型である．

(1) män　tursun’ay　bilän　mäktäp-kä　bar-i-män.
　私　PSN　一緒に　学校-DAT　行く-PRS-1SG
「私はトゥルスンアイと学校へ行く」

---

[1] 本稿でのデータは小説や物語から収集したものに基づいている．なお，本稿は日本言語学会第 149 回大会（於愛媛大学）の口頭発表の内容を改訂したものである．発表時に質問・コメントをくださった方々，そして査読者 2 名の方を含め，本稿作成に際してご助言をくださった方々に，記してお礼申し上げます．また，現代ウイグル語の例文の確認には 3 名の母語話者（男性 2 名・女性 1 名．全員，ウルムチ出身）から協力を得ている. この場を借りて感謝の意を表します. 本稿における誤りはすべて筆者の責任に帰する．

[2] -liq～-lik～-luq～-lük の交替形がある．

語類は，動詞と名詞類（nominal）とに大別される．名詞類には，名詞・代名詞・形容詞・数詞・副詞などが含まれ，このうち，形容詞と名詞，および形容詞と副詞との区別は明確でない．つまり，形容詞が名詞として，あるいは形容詞が副詞として機能することがある（Hahn 2006: 134-135）．名詞・形容詞ともに文の述語になる機能（例文(2)参照）や，他の名詞を修飾する機能（例文(3)参照）を持つ．

(2) a. u oqutquči.
彼（女）教師
「彼（女）は教師だ」

b. u yaxši.
それ 良い
「それは良い」

(3) a. yaʁač öy
木 家
「木の家」

b. yaxši adäm
良い 人
「良い人」

名詞には複数接辞，所有接辞，格接辞といった曲用接辞が後続するが，形容詞もこれらの接辞を取ることができる．(4a)・(4b)はそれぞれ名詞と形容詞に複数接辞が続く例である．

(4) a. oqutquči-lar
教師-PL
「教師たち」

b. koni-lar[3]
古い-PL
「昔の人々」

形容詞は動詞を修飾し，副詞としても機能することができる．

(5) yaxši oqu-di.
良い 学ぶ-PST
「よく学んだ」

したがって，ある語の語類は，その語自体が持つ形態的・意味的な特徴のみでなく，他の要素との連辞関係によって決まるところが大きいと言える．

３．-lIK の用法

ここでは，-lIK が先行研究でどのように扱われているかを見る前に，まず，-lIK の用例を簡略に示す．現代ウイグル語の-lIK は生産性の高い接辞であり，名詞や形容詞に付いて，形容詞・名詞・副詞といった語類を派生する（例はそれぞれ(6a), (6b), (6c)を参照）．

[3] 元の形は kona であるが，koni となっているのは，後続している複数接辞の影響による．

(6) a. qoral-***liq*** b. yüksäk-***lik*** c. dawam-***liq***
武器-lIK 高い-lIK 続き-lIK
「武器を持った，武装した」 「高さ」 「続けて」

-lIK は動詞を基体とすることもできるが，その場合，動詞語幹には直接付かず，(7)で示すように，動名詞化接辞-(I)š など他の接辞を介して付くことになる．つまり，-lIK は基本的に名詞や形容詞などの名詞類に付く．

(7) tur-uš-***luq*** qara-š-***liq***
住む-VN-lIK 属する-VN-lIK
「駐在している」 「属する」

-lIK により派生された語の表す意味は多様であり，日本語の「～の」,「～的」などに相当する．具体例を示せば，(8)のように，地名に付いてその土地の出身であることを表したり，(9)や(10)のように-lIK の付加先の語が指示するものを所有することを表す．また，(11)の“š”-***liq*** のように辞書に記載がなされていない例も確認される．

(8) siz qäyär-***lik***? — män qäšqär-***lik***.
あなた どこ-lIK 私 カシュガル-lIK
「あなたはどこ出身ですか?」—「私はカシュガル[4]出身／カシュガル人です」

(9) ’äqil-***liq*** dost
知恵-lIK 友達
「賢い友達（知恵を持っている友達)」

(10) daŋ-***liq*** naxšiči
名声-lIK 歌手
「有名な歌手（名声を持つ歌手)」

(11) “š”-***liq*** išimdaš
“š”-lIK 動名詞
「“š”の動名詞（“-š”という接辞が付いた動名詞）[5]」

-lIK が付いた語（以下，“X-lIK”と表す）は，(12)のように句末に位置したり，(13)のように節末に位置することがある．

[4] 南新疆の都市の名前．
[5] sözlä-š「話すこと」（sözlä-「話す」），kör-üš「見ること」（kör-「見る」）のように，動詞語幹に接辞-(I)š が付加されることによって作られる動名詞のこと．

(12) [’ap’aq　saqal]-***liq***　bir　boway
真っ白　髭-lIK　　1　　老人
「真っ白な髭のおじいさん」

(13) [men-iŋ　　käl-gän]-***lik***-im-ni　　kim-din　aŋli-di-ŋ.
私-GEN　来る-PTCP.PST-lIK-POSS.1SG-ACC　誰-ABL　聞く-PST-2SG
「（君は）私が来たことを誰から聞いたの」　（Tömür1987: 267）

(12)や(13)において，-lIK の付加先はそれぞれ，(12)では saqal（「髭」），(13)では kälgän（「来た」）である．意味的には，(12)では’ap’aq saqal（「真っ白な髭」）が一つのまとまりを成し，(13)では meniŋ kälgän（「私が来た（こと）」）が一つのまとまりを成しているため，(12)や(13)は句や節全体に-lIK が付いているようにも思える（-lIK の付加先については 5 節で後述する）．以下に，先行研究で-lIK がどのように記述されているのかを見る．

４．先行研究

托乎提（2012: 138,146）では，名詞および形容詞の項目において，-lIK を派生接辞として紹介している．句末に“X-lIK”が位置する場合も，形容詞を派生する接辞として-lIK を扱っている．一方で，それらとは別に取り上げられ，「名詞化接辞」とされているのが次の(14a), (14b)の例である．

(14) a. Män　sen-iŋ　　’öy-dä-***lik***-iŋ-ni　　bil-i-män.
私　　君-GEN　家-LOC-lIK-POSS.2SG-ACC　知る-PRS-1SG
「私は君が家にいることを知っている」

b. Yol-niŋ　bunčilik　　’uzun-***liq***-i-ni　　bil-mä-pti-män.
道-GEN　このように　長い-lIK-POSS.3SG-ACC　知る-NEG-PF-1SG
「道がこんなにも長いことを知らなかった」　（托乎提 2012: 293 を一部改変）

托乎提（2012: 293）の指摘に従うと，(14a), (14b)はそれぞれ，(15a)と(15b)と置き換えが可能であるという．

(15) a. Män　sen-iŋ　　’öy-dä　　’ikän-***lik***-iŋ-ni　　bil-i-män.
私　　君-GEN　家-LOC　COP-lIK-POSS.2SG-ACC　知る-PRS-1SG
「私は君が家にいることを知っている」

b. Yol-niŋ　bunčilik　　’uzun　’ikän-***liq***-i-ni　　bil-mä-pti-män.
道-GEN　このように 長い　COP-lIK-POSS.3SG-ACC　知る-NEG-PF-1SG
「道がこんなにも長いことを知らなかった」

(14a)の’öydä***lik***iŋni と(14b)の’uzun***liq***ini は(15a)と(15b)におけるコピュラの’ikän が縮約されたものであるとされており，また，その場合（’ikänlik の縮約形である場合）には-lik/-liq という異形態のみが現れることができ，-luq/-lük は現れることがないと指摘されている．

他方，生成文法の枠組みを用いた Asarina and Hartman（2011: 5）では，(13)のような“X-lIK”が節末に位置するものに言及し，-lIK を補文標識（complementizer）としている．

以上のことは，次のように整理される．-lIK は基本的には派生接辞とされる．“X-lIK”が句末に現れる場合も派生接辞として取り扱っているものが見られる（托乎提 2012，Tömür 1987 など）．“X-lIK”が節末に位置するものは，「名詞化接辞」（托乎提 2012）や「補文標識」（Asarina and Hartman 2011）などとされ，節全体に-lIK が付いて機能しているように捉えられている．(13)～(15)で見た例における-lIK は，生産性の高い，典型的な派生接辞である-lIK とは別の形態素であると捉えられていることになるが，先行研究では直接そのことに言及しているわけではない．本稿では，確かにこれらの用法には異なりがあるものの，派生接辞とされる-lIK と，それとは区別され，節全体に付くように捉えられている-lIK との間に接点があることを示す．

５．-lIK の付加先について

先に 3 節で「意味的には[中略]句や節全体に-lIK が付いているようにも思える」と述べたが，ここでは，構造上実際に-lIK がそのような統語的な単位に付いているのかどうかを，等位構造と属格名詞句を使って確かめる（これらを用いる理由は，等位接続詞や，属格接辞・所有接辞といった要素から，句を構成していることが分かりやすいためである）．

5.1 等位構造への付加

-lIK による派生語に gül-***lük***（「花柄の」）と räŋ-***lik***（「色付きの」）という語がある．(16a)のように，これらは等位接続詞（wä）で結ばれた場合，どちらの派生語も名詞 löŋgä（「タオル」）を修飾することができる．それに対して，(16b)のように，派生語の語幹同士が等位接続詞で結ばれた句に-lIK を付けた場合，(16a)と同じ意味を表すことはできない（(16b)は「花と，（そして）色付きのタオル」という風に，「花」という個体と「色付きのタオル」という個体が，別々に存在するという読みであれば，文法的である）．

(16) a. gül-***lük*** wä räŋ-***lik*** löŋgä
花-lIK と 色-lIK タオル
「花柄で色付きのタオル」

b. *[gül wä räŋ]-***lik** löŋgä
花 と 色-lIK タオル
「花柄で色付きのタオル」

したがって，等位構造をなしている句には-lIK が付加できないということになる．

5.2 属格名詞句への付加

筆者が収集した用例からは得られなかったが，托乎提（2012）によると，(17)のような，属格名詞句に-lIK が付いている形式が方言で存在するとされている[6].

(17) yol-da [biz-niŋ mähälli-miz]-***lik*** bir-si-ni ’učrit-ip qal-di-m
道-LOC 私たち-GEN 地区-POSS.1PL-lIK 1-POSS.3SG-ACC 出会う-CVB 残る-PST-1SG
「道で私たちの地区の一人に出会った」 （托乎提 2012: 147）[7]

(17)の例では属格名詞（bizniŋ）と所有名詞（mähällimiz）とが照応（concord）しており，一つの句をなしていることが形態的な面からより明確であると思われる．この例を用いて母語話者に確認したところ，3 名のうち 2 名から文法的であるとの判断を得た[8].

(16)から分かるのは，-lIK があらゆる統語論的な単位に付くことができるわけではないということである．実際に統語的な単位に-lIK が付いていると言える(17)との違いは，句に含まれている要素が，“X-lIK”の“X”の部分を修飾しているという点であることが分かる（この点は，(12)～(15)とも共通する）．そのため，句や節全体に-lIK が付くことができるのは，等置のような関係ではなく，“X-lIK”の“X”の部分を修飾している要素を句や節の要素として含む場合であるということになる．

６．“X-lIK”の機能について

この節では，-lIK の分布ごとにその機能を見ていく．

6.1 “X-lIK”が他の要素から修飾を受けていない場合（句末や節末に位置しない場合）

-lIK は生産性が高い接辞であり，3 節の(6a)～(6c)に示したように形容詞・名詞・副詞を派生することができる．実際に文中で用いられている例を(18)～(20)に挙げる．

(18) ’at-***liq*** bir yigit
馬-lIK 1 若者
「馬に乗った若者」

(19) biz ’ärkin-***lik***-kä ’eriš-tu-q !
私たち 自由な-lIK-DAT 達する-PST-1PL
「私たちは自由へ達した!（私たちは自由になった）」

---

[6] 具体的にどの方言なのかは言及されていない.

[7] 欠如を表す接辞である-siz に関しても，類似の例が挙げられている：
(i) sen-iŋ yardim-iŋ-siz (ii) men-iŋ ruxsit-im-siz
君-GEN 助け-POSS.2SG-siz 私-GEN 許可-POSS.1SG-siz
「君の助けなし（に）」 「私の許可なし（に）」 （托乎提 2012: 147）

[8] (17)を文法的であるとした母語話者のうちの 1 名からは，所有人称接辞が現れていない bizniŋ <u>mähälli-***lik***</u> の方がより自然であるとのコメントを得ている.

(20) nahayiti　köngül-***lük***　’ötküz-ül-üptu.
とても　気持ち-lIK　挙行する-PASS-PF.EV
「とても楽しく挙行されたそうだ」

ここまでに，「-lIK が形容詞を派生する」ないし「名詞を派生する」という言い方をしてきたが，用例を見ていると，“X-lIK”の統語中における機能が単一でないことに気づく．具体的には，“X-lIK”が名詞的にも形容詞的にも機能するということである．たとえば，(18)の’at-***liq***（「馬-lIK」）は，後に続く名詞の bir yigit（「ある若者」）を修飾しており，形容詞として機能していることが分かるが，同時に，(21)で示すように複数接辞や格接辞が付いて，名詞として機能することもある．

(21) ’at-***liq***-lar-niŋ　bir-i.
馬-lIK-PL-GEN　1-POSS.3PL
「馬に乗った者たちのうちの一人」

このように“X-lIK”が形容詞的にも名詞的にも機能する例は他にも見られる．

(22) a. bir　toʁraq-***liq***　mähälli-dä
1　トグラク-lIK　地区-LOC
「トグラク[9]の生えている地区で」

b. toʁraq-***liq***-qa　kir-ip　ket-iptu.
トグラク-lIK-DAT 入る-CVB　行く-PF.EV
「トグラク（の林の中）へ入って行ったそうだ」

他の接辞との承接順序について言及すると，派生接辞は一般的に語幹に近い部分に現れるとされ（Haspelmath and Sims 2010: 95），したがって，接尾辞型の現代ウイグル語では通常，派生接辞が屈折接辞に先行する．(19)や(21), (22b)で見るように，-lIK の後に複数接辞や格接辞などの屈折接辞が続くという点で，-lIK は一般的な派生接辞の性質を示すと言える．また，-lIK にはさらに派生接辞を付加することも可能である．

(23) ’asan-***liq***-čä
簡単な-lIK-ADVLZ
「簡単に」

なお，同じくチュルク諸語であるサハ語において，生産性が高く，所有の意味を表す接尾辞である-LEEx という形式が複数接辞を含む語幹に付加しうることが指摘されている（江

[9] 植物の名前．

畑 2012: 75）が，現代ウイグル語ではそのような承接順序を取ることができない（たとえば(21)で，’at-***liq***-lar-niŋ の-lIK と複数接辞の-lAr とを入れ替えることはできない）.

6.2 “X-lIK”が句末に位置する場合

“X-lIK”が句末に位置する場合，“X-lIK”の X の部分は他の要素によって修飾されていることになる．具体的な例を示すと，(24)では’on säkkiz（「18」）が（-lIK の付加先の）yaš（「年齢」）を修飾しており，意味的には’on säkkiz yaš（「18 歳」）で一つのまとまりをなしているとみなせる.

(24) [’on säkkiz yaš]-***liq*** bir qiz
10 8 年齢-lIK 1 少女
「18歳の少女」

ところで，托乎提（2012）や Tömür（1987）では，句末に現れる“X-lIK”が形容詞的な機能を持つものとして記述されているが，母語話者によると，(25)で示すように名詞的にも機能しうる.

(25) [’on säkkiz yaš]-***liq***-lar
10 8 年齢-lIK-PL
「18歳の者たち」

したがって，“X-lIK”が句末に位置する場合にも，6.1 節の(18)・(21)や(22)で見たように，統語的機能が一つに限定されないと言える．同様のことが単純語に関しても指摘できる（形容詞が名詞的にも機能することは 2 節で述べた通り）.

6.3 “X-lIK”が節末に位置する場合

“X-lIK”が節末に位置する場合，その節の述語の種類は主に次の 3 つに分けられる：1) 動詞述語，2) 名詞／形容詞述語．3) 存在（または所有）述語．以下に例を示していく.

1) <u>節の述語が動詞の場合</u>

(26) [böǰän-niŋ kawi-ni qandaq ’äkäl-gän]-***lik***-i-ni ’oyla-p
兎-GEN 南瓜-ACC どう 持ってくる-PTCP.PST-lIK-POSS.3SG-ACC 考える-CVB
tap-ala-m-silär?
見つける-ABIL-Q-2PL
「兎が南瓜をどうやって持ってきたのかを考えつきますか」

(27) [’api-si　　’ärkin-niŋ　säkrä-watqan]-***liq***-i-ni　　kör-üp
母親-POSS.3SG　PSN-GEN　飛び跳ねる-PTCP.PROG-lIK-POSS.3SG-ACC　見る-CVB
「母親はエルキンが飛び跳ねているのを見て」

節の述語が動詞の場合，形動詞化接辞[10]の後ろに続いている(26), (27)の-lIK は，なくても非文法的にはならない[11].

2) <u>節の述語が名詞または形容詞の場合</u>
名詞述語または形容詞述語が埋め込まれる場合には，’ikän というコピュラ要素が現れる．また，名詞述語や形容詞述語の否定文には’ämäs という否定の語が用いられる．

(28) maymun [quyruq-i-niŋ　’öz-i　’üčün nahayiti muhim　’ikän]-***lik***-i-ni
猿　尻尾-POSS.3SG-GEN 自分-POSS.3SG ためにとても　大事な　COP-lIK-POSS.3SG -ACC
bil-iptu.
知る-PF.EV
「猿は，尻尾が自分にとってとても大事であることを知った」

(29) [ǰumatay　yat-qan　yär-ni　tep-iš-niŋ　täs　’ämäs]-***liq***-i-ni
PSN　眠る-PTCP.PST 場所-ACC 見つける-VN-GEN 簡単 ない-lIK -POSS.3SG-ACC
’eyt-ip
言う-CVB
「ジュマタイが眠る場所を見つけることが簡単でないことを告げて」

3) <u>節の述語が存在（または所有）を表す語の場合</u>
存在文もしくは所有文は，肯定であれば bar（「いる，ある」）という語を，否定であれば yoq（「いない，ない」）という語を文末に置くことで表される（bar/yoq の構文を単文で示す．(30)が存在文，(31)が所有文の例）．

(30) a. sinip-ta　’oquʁuči　bar.　　b. sinip-ta　’oquʁuči　yoq.
教室-LOC　学生　いる　　教室-LOC　学生　いない
「教室に学生がいる」　　「教室に学生がいない」

[10] 形動詞形は形容詞的にも名詞的にも機能する．
[11] 副動詞化接辞とされる-Gičä にも-lIK が後続することがあるが，その場合も-lIK がなくても非文法的にはならない（(iii)で-Gičä の ä が，qiči となっているのは後続する接辞である-lIK の影響と考えられる）．
(iii) yamʁur　taŋ　’at-qiči-***lik***　yaʁ-di.
雨　日　昇る-CVB-lIK　降る-PST
「雨は日が昇るまで降った」　（Tömür1987: 276）

(31) a. men-iŋ　’aka-m　bar.　　b. men-iŋ　’aka-m　yoq.
私-GEN　兄-POSS.1SG ある　　私-GEN　兄-POSS.1SG ない
「私には兄がいる」　　「私には兄がいない」

これらに-lIK が付いた例が(32), (33)である．

(32) [silär-niŋ　qandaq　xuy päyl-iŋlar-niŋ　bar]-***liq***-i-ni　män
あなたたち-GEN　どんな　性格-POSS.2PL-GEN　ある- lIK -POSS.3SG-ACC　私
’apa-m-din　köp　aŋli-ʁan.
母-POSS.1SG-ABL 多く　聞く-PTCP.PST
「あなたたちがどのような性格であるかを，私は母からよく聞いた」

(33) [’adäm　yoq]-***luq***-ni　bayqi-ʁan-din　keyin
人　ない- lIK -ACC　分かる-PTCP.PST-ABL あと
「人がいないのを確認したあとで」

以上に見てきた“X-lIK”が節末に位置する例では，全体的な共通点として，“X-lIK”を含む節が名詞的にのみ機能していることが分かる．“X-lIK”が節末に位置する場合は以下の(34b), (35b), (36b)の例で見るように形容詞的には機能できない.

(34) a. [kawi-ni　kör-gän]　’ana
南瓜-ACC 見る-PTCP.PST 母親
「南瓜を見た母親」

b. * [kawi-ni　kör-gän]-***lik***　’ana
南瓜-ACC 見る-PTCP.PST-lIK 母親
「南瓜を見た母親」

(35) a. [’oquʁuči　bar]　sinip
学生　ある　教室
「学生がいる教室」

b. *[’oquʁuči　bar]-***liq***　sinip
学生　ある-lIK　教室
「学生がいる教室」

(36) a. [’oquʁuči　yoq]　sinip
学生　ない　教室
「学生がいない教室」

b. *[’oquʁuči yoq]-***luq** sinip
学生　ない-lIK　教室
「学生がいない教室」

このように統語中における機能が限定されるのは，6.1 節や 6.2 節で見てきた例（名詞的にも形容詞的にも機能できる例）とは異なる点である．先行研究での記述の仕方に加え，このことから 6.1 節と 6.2 節で見てきた-lIK と 6.3 節で見た-lIK を別のものと見なせるかもしれないが，6.1 節で見た-lIK（典型的な派生接辞として捉えられているもの）が，節末に現れる-lIK と類似した性質を持つことを次の節で示す.

７．句接辞との関連

“X-lIK”が辞書に登録されていながら，-lIK の基体に含まれる動詞語幹が統語的に項を取っているのが次の例である.

(37) qumul-da　tur-uš-***luq***　härbi
クムル-LOC 住む-VN-lIK　兵隊
「クムル[12]に駐在している兵隊」

(38) šamäxsut　waŋ-ʁa　qara-š-***liq***　puqra-lar
PSN　王-DAT　属する-VN-lIK　民-PL
「シャーメフスット王に帰属する民」

(39) zähär guruppi-lir-i-ʁa　čet-iš-***liq***　jinayätči-lär
毒　グループ-PL-POSS.3SG-DAT つなぐ-VN-lIK 犯人-PL
「毒物に関係している犯人たち」

上記の例の turuš-***luq***（「駐在している」）や qaraš-***liq***（「属する」），četiš-***liq***（「関係のある」）は，動詞語幹と動名詞化接辞の-(I)š と-lIK から構成されており，辞書に記載されていることから語彙的なものであると言えるが，実際に用例を見てみると，(37)では qumul が tur-（「住む」）の補語になっている．また，(38)では waŋ が qara-（「属する」）の補語になっており，(39)では guruppiliri が čat-（「つなぐ」）の補語になっていることが分かる．言い換えれば，-lIK の付加先である基体に含まれている動詞の語幹が項を取るという統語的な機能を保っているということになる.

このような性質は，句接辞（phrasal affix）と呼ばれるものと関連していると考えることもできる．日本語の例を影山（1993）から以下に引用する.

[12] 新疆東部の都市の名前.

(40) [なにか言いた] げ（だ）
[仕事にかかり] っきり
[お金を借りっ] ぱなし （影山 1993: 329）

句接辞とは，上の例の「-げ」「-っきり」「-っぱなし」などが相当し，影山（1993）によると，「もともと句ないし節を対象とする接辞」とされる．6.1 節～6.3 節に見た-lIK も句接辞として捉えれば，その性質が統一的に説明できるのではないかと思われるが，このことについては，-lIK 以外の接辞も調べていく必要がある[13].

８．まとめ

ここまでに述べてきたことをまとめておく．

まず，3 節で-lIK の意味と用法について触れ，基本的に名詞類に付くものであり，所有や出身などの意味を表しうることを述べた．4 節では先行研究を整理し，典型的な派生接辞として捉えられているものと，そうでないものがあることを示した．5 節では-lIK が構造上，句や節全体に付きうるのかを確認し，等位構造のような統語的単位を構成する場合には，-lIK は付加できないが，“X-lIK”の“X”の部分を修飾する要素を含む句や節である場合は，-lIK が付加できるということを示した．6 節では，-lIK の分布ごとに用例を見た．6.1 節では“X-lIK”が（名詞や形容詞の）単純語と同様に，名詞的にも形容詞的にも機能しうることを指摘した．6.2 節では“X-lIK”が句末に位置する例を考察した．特に，先行研究では“X-lIK”を句末に含む句が，形容詞的に機能することにのみ言及しているが，本稿ではそれらが名詞的にも機能することを述べた．6.3 節では“X-lIK”が節末に位置する例を考察した．“X-lIK”が節末に位置する場合，6.1 節や 6.2 節での例と違って，“X-lIK”を含む節の統語的な機能がもっぱら名詞的なものに限られるのが特徴的である．このような機能上の違いから，6.1 節・6.2 節に見られる-lIK と 6.3 節に見られる-lIK とを別の形態素として区別することも可能であるが，7 節において，語彙的に辞書に登録されているにも関わらず，-lIK の付加先の基体に含まれる動詞語幹が項を取っている例が見られることから，現代ウイグル語の-lIK の性質は影山（1993: 329）で「句接辞」とされるものと類似していることを指摘し，また句接辞として捉えると 6.1～6.3 節で見た-lIK の性質を統一的に説明できるのではないかとした．

なお，-lIK のストレス（強勢）の置かれ方については，個人により違いがあることが指摘されている（例：táʁ-liq/taʁ-líq「山の」（山-lIK）．Hahn 2006: 29, Comrie 1997: 925）．そのため，今後の課題として，超分節音的な面からも-lIK を考察することが挙げられる．それにより，-lIK の性質をさらに明らかにできるのではないかと筆者は考える．

[13] -lIK の他には，注 7 に挙げた-siz や，-däk/-täk（「～のような」）が句接辞と思われる性質を持つ．特に後者（-däk/-täk）は，屈折接辞である複数接辞に後続する例が認められるという点で，-lIK と大きく異なる．

略号

ABL: 奪格　ABIL: 可能　ACC: 対格　ADVLZ: 副詞化　COP: コピュラ　CVB: 副動詞　DAT: 与格　EV: 証拠性　GEN: 属格　LOC: 位置格　NEG: 否定　NPST: 非過去　PASS: 受身　PF: 完了　PL: 複数　POSS: 所有　PROG: 進行　PRS: 現在　PSN: 人名　PST: 過去　PTCP: 形動詞　Q: 疑問　SG: 単数　VN: 動名詞　1: 1 人称　2: 2 人称　3: 3 人称

参考文献

Asarina, Alya and Hartman Jeremy（2011）Genitive subject licensing in Uyghur subordinate clauses. In *Proceedings of the 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics*. MITWPL.

Comrie, Bernard（1997）Uyghur Phonology. In: Alan S. Kaye (eds.) *Phonologies of Asia and Africa 2*. 913-925. Eisenbrauns: Winona Lake.

江畑冬生（2012）「サハ語の所有を表す接尾辞-*LEEx*」『北方言語研究』2. 73-90. 北海道大学大学院文学研究科.

Hahn, F. Reinhard（2006）[1991] *Spoken Uyghur*. Seattle: University of Washington Press.

Haspelmath, Martin and Sims, D. Andrea（2010）*Understanding morphology*. New York: Routledge.

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京: ひつじ書房.

菅原純（2009）『現代ウイグル語小辞典』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

托乎提, 力提甫（2012）『現代維吾尔語　参考語法』北京: 中国社会科学出版社.

Tömür, Hamit（1987）*Hazirqi zaman Uyghur tili grammatikisi（morfologiye）*. Beijing: Minzu Publishing House.

The Suffix -lIK in Modern Uyghur

Shiho NITTA
（Graduate School, Okayama University）

This paper analyzes -lIK, a productive suffix in Modern Uyghur. In the literature, -lIK has been treated from morphological or syntactic perspectives. The present paper examines both of these two aspects of -lIK. Particularly, I point out that while words suffixed with -lIK are registered in the lexicon as such, the verbal stem to which -lIK attaches can still preserve its syntactic function.

（にった・しほ　matsuyama.salt@gmail.com）